

# H. J. ラスキの政治思想

## —— 初期作品の「主権三部作」<sup>(1)</sup>を中心に ——

The Political Ideas of Harold J. Laski

—— Study of 'Three Works on Sovereignty' in His Early Days ——

梶 沢 栄 一  
Eiichi Gumisawa

It is said that the political ideas of Harold J. Laski sometimes changed in response to the circumstances of the age, because of his pragmatic method. But I research some characteristics of 'Three works on Sovereignty' in his early days, and study the consistency in his political ideas on this essay. As for the consistency, it is in a word 'how to best realize oneself' and 'how to secure liberties' for that.

1. はじめに
2. 「主権三部作」の思想的背景
3. 「主権三部作」の展開
4. 「主権三部作」の問題
5. むすびにかえて

### 1. はじめに

#### 1) 問題提起

没後40年を経て、まもなく生誕100年を迎えようとする H.J. ラスキ (Harold Joseph Laski 1893～1950) の政治思想を論究するにあたり、その視座を明確にすることは、大変重要なことに思う。ラスキの政治思想、特に彼の多元的国家論は、戦後まもなく、わが国においても大変注目され、ブームを引き起こしたほどである。戦後民主主義の復興、政党の再編、労働組合などの社会的勢力の振興という戦後の日本の政治過程の中で、ラスキの政治理論は、民主主義思想としてはもとより、その奇抜さと特異さをもってして、研究者の注目を集めたのである。多くの論文が書かれ、翻訳も数多く出版され、その可能性や有効性、そして限界についても議論がかわされた。<sup>(2)</sup> 専門的理論から評論まで含めると

相当の数にのぼるであろう。<sup>(3)</sup> そして昨今、この流行が退潮してから久しい。今日、ラスキの政治思想は、古典に入ったとさえいわれている。しかし、われわれは、このような状況だからこそ、また改めてこの思想の本質的部分を探り、思想史的意義を検証することが大変重要なことであるように思うのである。なぜなら、流行やブームが引き起こす一時的現象は、その思想のアクチュアリティに主に傾注することにより、思想の本質や本源を軽視する恐れがあるからである。思想史の研究は、時代の冷却の後、すなわち流行やブームが去ってからの研究に、存外に意義があるように思うのである。時代を画す思想は、もちろん、流行やブームを引き起こすが、またその思想は、これらの一時的現象が去った後に、その本質をあらわすものである。いわゆる古典となった思想は、そのアナクロニズムのゆえに埋葬されてしまうのではなく、古典たるゆえに、その生=意義をふき返すのである。それは古典として復活したことが、何らかの普遍性を含むことを暗示するものだからである。われわれは、ここに古典としてカテゴライズするにはあまりに現代的であるのであるが、ラスキの政治思想を探る意義を求めたいと思う。

ところで、ラスキの政治思想は、その発展過程において、三段階や五段階に分けられている。<sup>(4)</sup> われわれは、ここでは四段階に分けてみよう。第一段階は、1910年代後半における政治的多元主義思想を展開した時代である。これは、「主権三部作」といわれる三冊の著書の中に特に展開される理論で、ラスキの政治思想の原基を形成するものと同時に、リベラルでプルラリスティックなものであった。第二段階は、1925年に著わされた『政治学大綱』(Grammar of Politics)に代表される多元的国家論の完成期である。いわゆる多元的国家論者としてのラスキの名が、後世にまで残るようになるのは、この時期の彼の思想のインパクトの結果である。第三段階は、1930年代を中心に、彼がマルクス主義に接近する時期である。『国家—理論と実際—』(The State in Theory and Practice, 1935)は、まさにその頂点に立つもので、マルクス主義の立場で現代国家の分析が展開されている。そして、第四段階は、ラスキの人生後半になるが、1943年に著される『現代革命の考察』(Reflection on the Revolution of Our Time)において展開される「同意による革命」(a revolution by consent)や「計画的民主主義」(a planned democracy)の理論である。これは、ソビエト・ Kommunizmus に内在する独裁制に強い警戒心を示しながら、民主主義と社会主義の統合をはかろうとするラスキの未完でこそあるが、彼の晩年の思想となったものである。<sup>(5)</sup>

このようなラスキの思想段階を、彼の思想の移行とするか、発展とするか、はたまた転

向とするかは論者によって様々である。<sup>(6)</sup> 確かに、ラスキの思想は、その特色ともいえるプラグマティックな一面があり、時代や状況により変化している。ましては、微視的分析により論理を検討していけば、その非一貫性を容易に指摘することができよう。また、多くの理論的矛盾を含んでいることも、論者によって指摘されているところである。<sup>(7)</sup> しかし、われわれが、ラスキの政治思想をして、再検討をせまるとすれば、もう一つの視点、つまり、巨視的視点も重要になってくるであろう。これはまた、連続性の視点とも、整合性の視点ともいってよかろう。<sup>(8)</sup> 彼の思想に底通する何か一貫したものを探りあてる視点である。この作業は、変化を指摘していくより、むしろ、困難なことかもしれない。丸山真男氏は、ラスキの思想の推移に言及して、いみじくも次のように述べている。少し長いが引用しておこう。

いうまでもなく思想家も彼の立場を絶えず新たな事実と経験によって吟味し修正しつつ発展して行く。不変性は思想家の名誉ではないし、転向は必ずしも彼の不名誉ではない。問題はまさにその立場の回転なり変化なりがいかなる内的必然性をもって行われたかということにあるのである。その意味では、一個の思想家の生涯には、必ず彼の変化を規定しているある不変なものが見出される筈だ。……ラスキの思想的な推移の跡をたどるならば、そこにはこうした「突然変異」といったものは到底認められない。かえって彼の著書を時代順に詳細に検討する努力を惜しまない者は、彼の思想のあらゆるヴァリエーションの基底に同一の主旋律が一本の太い線のように流れているのを容易に見出すであろう。この主旋律を手がかりとしてラスキの多彩な叙述をたぐって行くと、さきに彼の20年代の著書と40年代の著書との間の距離に驚いた者は今度はむしろその間の連続性に驚かされる。<sup>(9)</sup>

そして、丸山氏は変化を規定する不変なものを、次のように鋭く読みとっているのである。

それは人格的自我の実現を最高の価値とする立場である。そうしてそのコロラリーをなすものは、「すべての権力は腐敗の傾向をもつ」というあのアクトン卿 (Load Acton 1837~1902) の著名なテーゼである。この個人の内的価値に対するアイデアリズムと政治権力に対するリアリズムとが一貫して彼 (ラスキ) の判断の基準となっている。<sup>(10)</sup>

さて、本稿では、ラスキの政治思想の変化を規定する不変なるものを求めて、彼の第一段階の政治的多元主義の思想を「主権三部作」の中に探してみたいと思うが、その前に、

ラスキの生涯をクロノロジカルに若干みておくことにしよう。<sup>(11)</sup>

## 2) 若干のプロフィール

ラスキは、1893年6月30日、マンチェスターで生まれた。父は裕福な木綿商人であった。彼はまた、ユダヤ人達の指導的地位にあり、様々な活動において活躍し、名望家であり、慈善家でもあった。ラスキがこのユダヤ人の家に生まれたことは、彼の性格や運命に多大なる影響を与えるものであった。マンチェスター・グラマー・スクールに進んだラスキは、病弱であったが、猛烈な読書家であり、勉強家であった。彼が16歳の時、体を煩い入院した際に、ここで優生学やリハビリの講義をしていた女性、そして生涯の伴侶となるケリー (Frida Kerry 1885~?) と出会うことになる。宗教上の問題で両親は猛烈に反対したが、それでも二人は、ラスキが大学在学中の1911年の夏に結婚に踏み切った。このことは、両親による勘当を意味し、当然にも二人の前途は、経済的窮地に落ち入るのであった。1910年、オックスフォード大学への道が開かれ、フィッシャー (Herbert Albert Lourens Fischer 1865~1940)、バーカー (Ernest Barker 1874~1960)、メートランド (Frederic William Maitland 1850~1906) などに師事し、歴史学や政治学を学ぶことができたとは、ラスキの政治思想に、大きな影響を与えることになる。<sup>(12)</sup> 学生時代のラスキは、学問の徒ばかりでなく、すでにフェビアン協会<sup>(13)</sup>の一員になったり、婦人参政権運動にも熱心であった。1914年最終課程を終えたラスキは、第一次大戦が始まると同時に、志願兵として応募するのであるが、病弱を理由に拒否されている。ちょうどこの時期に、カナダのマックギル大学で歴史学の講師としての道が開けたのである。この時、ラスキはまだ若干22歳であり、若い教師として北米大陸に出発したのである。

カナダには二年間滞在し、1916年にはハーヴァード大学に移ることができた。ここでは、多くの友人を得、学問的交流を持つことができた。その中に、フランクフルター教授 (Felix Frankfurter 1882~1965) やホームズ判事 (Oliver Wendell Holmes 1841~1935) がいた。特に、ホームズ判事との親交は親密であり、往復書簡を通じての交友は生涯続いた。<sup>(14)</sup> そして、ホームズ判事のプラグマティズムはラスキの思想に多大なる影を落とすことになる。

1920年の夏に、ラスキ夫妻は帰国し、ロンドン・スクール・エコノミックスで、ウォーラス (Graham Wallas 1858~1932) 教授に代って、政治学の講義をすることになった。このころ、イギリス労働党にも入党し、社会的活動も始まる。しかし、どちらかというと講義や研究に没頭する時間の方が多く、1925年には『政治学大綱』が著わされ、世界的に

著名な政治学者としての堅固な地位を築くに至ったのである。

1930年代、世界は波瀾の幕開けで始まった。世界に広がる経済危機、ドイツやイタリアにあってはファシズムの抬頭、国内にあっては、マクドナルド (James Ramsay MacDonald 1866~1937) 内閣の失政、モズレー (Oswald Mosley 1896~1980) などの極右的運動の発生などが続々に起こった。<sup>(15)</sup> このような状況の中で、ラスキは、イギリスの伝統的議会主義に疑念を抱くと同時に、マルクス主義に接近したのである。

やがて、世界は、ヒトラーの世界征覇への野望により第二次世界大戦へと突入していく。ラスキは、一人の政治学者として、また労働党員として、この戦争に対する態度を明確にしている。それは、この戦争を反ファシズム戦争と位置づけ、そして、この戦を通して新しい社会秩序が、戦争中に築かれるべきだと考えたのである。それが、ラスキの戦中から戦後への政治を展望した『現代革命の考察』という書であった。これこそは、ソビエトとの距離を明確にしつつ、つまり、独裁主義の弊害を排除しながら、民主主義と社会主義をいかに統合発展させていくかを解き明かそうとするものであった。

1945年の総選挙は、労働党の圧倒的勝利に終わった。ラスキの理論的指導の影響が多であったことは、いうまでもない。しかし、ラスキはこのころ、様々な誹謗中傷にさらされることになる。<sup>(16)</sup> それは有名税にしては高すぎるものであった。1950年の総選挙は、労働党の評価が問われる重要な選挙であった。ラスキは、時間のゆるすかぎり政治集会に出席し、勝利を卓して応援演説をしたのである。この過酷な仕事は、彼の病状を益々悪化させることになった。この年の3月24日彼は肺膿種で亡くなったのである。享年54歳であった。それは、20世紀に生きた政治家であり、政治学者であったラスキの、自由と平等を実現するための戦いと、真理と幸福の追求の戦いの終焉でもあったのである。

## 2. 「主権三部作」の思想的背景

### 1) プラグマティズム

1914年から6年間のカナダ、アメリカの滞在は、ラスキの政治思想形成に多大な影響を与えるものがあつた。特にホームズ判事からの影響は、大変大きかった。それは、彼の思想の核心となっているプラグマティズムであつた。<sup>(17)</sup> そして、この哲学は、アメリカを代表する哲学者ジェームス (William James 1842~1910) によって確立された思想である。

この哲学は、もちろん、アメリカで生まれ発展したものであるが、ジェームスも認める

ように、その源といえば、バークリー (George Berkely 1685~1753) やヒューム (David Hume 1711~1776) などのイギリス経験主義哲学に繋がるものである。従って、イギリス人であるラスキにとっては、違和感は極めて少なく、異国で洗練され、本国よりはるかに多くの人々に影響を及ぼしている伝統のイギリス哲学に出会ったということになるかもしれない。とにかく抵抗感は、全くなかったようである。

プラグマティズムの基本的特色は、多元的思考と、動態的思考とにある。世界観が可能であるかという問いには、大部分の哲学者が肯定するところである。しかし、それが可能としても「一と多」の問題、つまり、実在は「一」であるか「多」であるかという問題は、古代ギリシア時代から引き継がれているアポリアである。一元論的世界観とは、宇宙は決して偶然なものでなく秩序ある一大体系であって、この宇宙を一切包括する絶対者によって、一切のことが決定されるというのである。この哲学の代表格は、なんといってもヘーゲル (Georg Wilelm Friedrch Hegel 1770~1831) であろう。彼の絶対精神は一切のものを包括するものであり、諸々の全体の全体である。ここにあっては、対立する思惟と存在、主体と客体が統一し、あらゆる矛盾の統一がなされるものとする。そして、この対立が統一されるところに成立するのが絶対者であり、それこそが唯一の真理であるとするのである。プラグマティズムは、この反駁から出発しているのである。ジェームズは次のように言う。「われわれの説く真理は、複数の真理、導きの諸々の過程であり、具体的な事物のうちに実現せられていて、報いてくれるという特質だけしか共有しない真理である。……真理が単に検証過程をあらわす集合名称に過ぎないのは、ちょうど健かさとか豊かさとか強さとかが生活と結びついた他の諸過程であらわす名前であり、またそれらを追求することが報いてくれるがゆえに追求されるのと同じことである。真理は、健やかさや豊かさや強さと同じように経験の経過するうちに作られるのである」<sup>(18)</sup> と。これこそ真理の多元性を主張するもので、真理こそは、経験の過程で作られると主張しているところは重要である。一元論者が真理を唯一のものとし、絶対的で不変なものとしたことに対し、多元論者としてのプラグマティストにとっては、真理は、複数多元的に存在し、しかも経験によって作られていくものであるとしたのである。

さて、プラグマティズムの多元的世界観は、ラスキの政治思想にどのように影響しているのだろうか、みてみよう。

まず第一に、国家一元論に対する反駁である。「主権三部作」の一つである『主権問題に関する研究』の中に、その点がすでに散見される。彼はその中で「私たちは、国家とい

うものが、その要素に対して多くの必要なる先天的優越性を持ちえないということを明確に知ることによって、社会のあり様の関係を眺めなければならない」<sup>(19)</sup>と言っている。これこそ、ラスキの政治理論構想への出発点である。彼はこの中で、自国の歴史的研究を通じて、国家一元論への批判の視点を明確にし、国家と教会の対立関係の意義を論じている。それは、キリスト教信者の精神的特権の維持と、信仰の自由を確保するため国家の権威の拘束から離脱することを主張するものであり、国家と教会の間に一線を引き、お互い領域侵犯を回避するものであった。

第二に、忠誠の多元性である。ラスキは言う。「あなた方は、物事を中心に、あなた方の個性を据えなければならない。そして、集群の人格が、あなた方の個性を引きつけるといふ集群の多様性に関連して、個性をみななければならない」<sup>(20)</sup>と。あくまでも個人が第一義的に存在し、個人を、多元的な各々の集群が引きつけるように競い合うのである。そして、そこでの個人は、ある集群に誘引され関係を結べば、それに対してのみ忠誠を誓えばよいということになる。さらに「国家も、個人がたまたま属する集群の一つである」<sup>(21)</sup>ということから「服従ということに対する国家の先天的要求を分解するものである」<sup>(22)</sup>という。つまり、あくまでも、個人の忠誠の多元性を前提に、国家を含めた諸集群が、個人の忠誠を獲得しようと努力するのである。忠誠の行為は、個人の側にあり、国家や集群などの上からの強制ごときものではないということになる。

第三に、多元的世界観は、ラスキによる個人の人格の構造にまで、影響を与えている。ラスキは、大変興味深いことに、次のように言っている。「われわれが出会う人間は、いろいろな衝動の束が一緒に行動して全人格をなしている。彼は仲間と一緒に暮らしたいだろう。彼らと礼拝できるように教会を建てるだろうし、沈黙の平和を楽しむようにクラブも創るだろう。……彼は自然への好奇心をいだき、その好奇心の多くの場合は、ジェームスが言う通り『蜜蜂やビーバーと同じく人間においても正直の抗しがたい本能』である建設能力を生みだすだろう」<sup>(23)</sup>と。つまり、人間の人格にあっては、衝動が多元的に存在し、それは、あらゆる方向に発展する可能性があるという。そして、その衝動は、自らのカタルシスを求めて活動することになる。これらの衝動が、具体的利益を実現するために、社会の中に形成されるのが、諸集群であるという。<sup>(24)</sup> このように、人間の人格を多元的構造として把握しようとするのは、ラスキの思想にきわだった特徴であり、まさしく、ここにプラグマティズムの影響をみることができるのである。

## 2) 伝統的な政治的多元主義

イギリスでは、ラスキより以前に、政治的多元主義の思想を唱える著名な学者が輩出した。彼がオックスフォード大学で学んだメートランド、バーカーがそうであった。また、フィギス (John Neville Figgis 1866~1919) という教会史に精通した聖職者も、ラスキにとっては重要な先達であった。イギリスにおけるこの政治思想発展の端緒は、メートランドが、ドイツの法学者であるギールケ (Otto Friedrich von Gierke 1841~1921) の著書『ドイツ団体法』 (Das deutsche Genossenschaftsrecht, 4 vol., 1868~1913) を翻訳し世に出したことから始まる。ギールケは、中世の社会を実証的に研究し、集団の人格を、国家主権によって保留あるいは保障されたものとして捉えるのではなく、アプリアリにあるものとして捉えるのである。集団人格の独立性が強調されたのである。メートランドの思想は、まさに、ギールケの延長上にあることがわかる。集団が、有機体的組織として、人格や意志を持つと主張したのである。これが、聖職者フィギスに継承されていくことになる。フィギスは、ギールケの法理論をふまえて、独自の団体としての教会における自由の保障の問題を展開したのであった。<sup>(25)</sup>

ここで、フィギスが、ラスキに与えた影響を若干みてみたい。フィギスの政治理論の出發は、個人に対し、いかに自己発展の機会を与えるかということである。この点に関しては、グリーン (Thomas Hill Green 1836~1882) などのイギリス理想主義の思想に共通するところがある。<sup>(26)</sup> しかし、後者が、自己発展の機会を国家や制度というような全体的体系に求めたのに対し、前者は、社会の中の集団、特に教会の自立の中に、それを求めたのである。フィギスが言うように、「われわれが現実的に世界において目撃するのは、一方において国家、他方において孤立した個人的大衆というのではなく、そのうちに個人、家族、クラブ、労働組合、大学、職業その他の集積された集群の巨大な複合である」<sup>(27)</sup> とする多元的社会観は、今までの政治概念でとらえられていた国家と個人というものに、集群というものをつけ加えるのである。そして、この集群という概念の確立は、個人の自由や自己発展が、この集群を通して可能になるということを導くものであった。そして、個人の集群への帰属が、より強調されるようになるのである。そして、彼が、イングランド教会の聖職にあったということからも、宗教的自己実現の関連で自由が論じられ、当然にもこの集群は、教会をさすのであり、その権威を高めることを、彼は強調するのである。ラスキの初期作品の『主権の問題に関する研究』は、まさにこの方法にのっとり、国家と教会の両者における権威の確立を、歴史的に考察するものであった。



さて、フィギスの理論についてもう一つの特色は、諸集群に比べて国家に独自の機能的概念を付与していることである。彼によれば、国家は「グループ、つまり、家族、学校、地域、組合、教会等の上昇的体系」<sup>(28)</sup>として特色づけられ、「国家の強制権力の存在は、グループを規制し、それらが正義の範囲を踏み越えないよう保障することである」<sup>(29)</sup>と言っている。そして、グループは、個人の発展のみでなく、「国家と呼ばれる『諸社会の中の偉大な社会』(society of societies)に対する忠誠」<sup>(30)</sup>を育てなければならないと言っている。これらの観点をみると、それは、むしろラスキの第二段階の思想、つまり多元的国家論完成期の国家概念に重なってくるものがある。この第二段階で、彼はフェビアンの集産主義者として、「国家は社会というアーチの要石」<sup>(31)</sup>であるとし、他の集群と全く同位でなく、むしろ諸集群にないものを明らかにしてくるのである。

以上、フィギスの多元的思考に焦点をあててみたが、ラスキのフィギス評価は、もちろん、これに留まるものではない。彼は、ホームズ判事への手紙の中で、次のように述べている。「私は、ある一定の、そして崇高な理由に基づいて、フィギスに思いをはせている。私は、記述的に教えられる政治学より、歴史的に教えられる政治学を修得したいと考えている」<sup>(32)</sup>と。歴史的考察に基づく政治学とは、一体どういうものか。それは、社会的矛盾や対立を呈する歴史の一定点に焦点をあてながら、そこでの理論と環境がどのような相互作用をもつのか、そして、その理論は、連続性をもつか非連続性をもつのかを考察しながら、未来への予見をも含む新たな政治理論を構想しようとするものである。これらの視点に基づく、ラスキとフィギスの関係については別稿で論じてみたい。

### 3. 「主権三部作」の展開

#### 1) 主権の所在

ラスキの初期の著作は、一言でいうなら、彼が、「神秘的な一元論」<sup>(33)</sup>と呼んだものへの絶えざる論争であった。この一元論とは、国家か他の全てのもの、つまり人間や集団よりも優位に立ち、形而上学的な一者あるいは神であり、これは、全ての市民より忠誠を得ることができるという国家理論である。これは、具体的には、17世紀末にホッブス(Thomas Hobbs 1588~1679)により苦心の上に仕立てあげられた『リヴァイアサン』(Leviathan, 1651)の絶対主義国家であり、オースチン(John Austin 1790~1859)が、一定の優越者として、社会のあらゆる部分に服従を強いることができるとした国家主権論である。ラスキは、この主権の概念に批判を加えることにより、一元的見解の徹底的な攻

撃に出たのである。彼は、主権の概念について次のように述べている。「主権とは、目的のために例外的な力に訴えることのできる特定の意志に対して与えられる名称に他ならない。主権には、神聖さとか、神秘さとかいったものは何もない。そして、もし主権の意味が何らかの意義をもつとすれば、主権は、ある限界においてのみ服従を獲得しうるものである。われわれは、その限界を越えるほどひどい政治的愚行を指摘することはできるけれども、限界を確実に予測したり、定義したりすることはできない。……近代民主主義においては、主権と国民全体を関連させることが通例となっている」<sup>(34)</sup>と。この中に、われわれは、二つの意味内容を探ることができる。一つは、主権が国家のみにアプリアリに存在するという主張を認めないということであり、もう一つは、主権が限界というものを持っており、その限界は確定したものでなく、状況により、つまりプラグマティックに変化するものであるという認識である。

さてこのような認識から、ラスキが始めたのは、通常近代政治学の出発点にいると考えられているボーダン（Jean Bodin 1530～1596）に対する批判である。彼こそは、法律的主権国家論の先覚者であり、実質的には国家の近代的法理論の礎を創った人物である。ラスキは、次のように言っている。「ボーダンは言う。『およそ主権の特質は、その臣民のすべてに法を与え、臣民から何も受けない権力を有するという、まさにその点に存する』と。主権者は、単独、あるいは少数、あるいは多数であるかもしれない。しかし、もしそれが絶対権力でないならば『尊厳』の特質を欠く。ボーダンの言葉の背後には、長い歴史が存する。ボーダンからホッブスを経て、オースチンに至るまで、国家を法的に分析しようとしたものはすべて、こう言った言葉の実質的内容に根拠をおいてきた」<sup>(35)</sup>と。つまり、組織された政治社会としての国家には、権威に裏づけられた主権が存在し、しかも、それは絶対権力をもって法をつくる。そして、これに基づく命令を発することになる。そして、この範囲は限定されることなく、あらゆる部分に浸透するものであり、主権を持つものは、行使する手段の強制力を苦慮する必要は何もないというのである。ラスキは、これに対する批判として「なぜ人は法に従わなければならないのかという問いに対し、この理論は、国家がかように意思するからにすぎないと答える」<sup>(36)</sup>点にあると指摘している。つまり、ラスキは、その根拠を全くあいまいにしておいて、形而上学的なものに、自然法的なものに、神法的なものに求める考えに、全く納得いかなかったのである。これはまた、前章で述べたプラグマティズムの忠誠の多元性という、ラスキの認識の基本的原理の一つから出てきた批判であることがわかる。

ここで、この時期にあって、法に対するラスキの独特の認識をみておこう。彼は言う。「私たちは、固定的な合法的システムを持つアプリオリな法に対して、生活を固定させることより、むしろ実際の生活の中で、法の力学を探究しなければならない」<sup>(37)</sup>と。つまり彼によれば、法は、形式的法理論にあってはならず、またその法の根源と国家とは直接には関係なく、社会的必要性を満す道具として法を捉え、分析するということである。<sup>(38)</sup> また彼に言わせれば、法は国家の意志の表現であったとしても、他の集群の意志の表現より優越するとは限らないということになる。「ある国家において、自らの存在を感じさせるほど大きい人々の集団は、ある要求の承認を求める時は、いつもその要求を無視しようとする法を認めないだろう。また、その法を強制する権威を受け入れないであろう」<sup>(39)</sup>と。まさにプラグマティックな法の定義である。ラスキが法を認めるとすれば、アプリオリに国家に帰属する法でもなく、それによって形式的に行使される法でもない。プラグマティックな法の定義とは、結果としての「善さ」(good)が実現した時の法である。ここでわれわれは、ラスキの見解の困難性に出会うことになる。つまり「善さ」とは一体何か。これを測る基準はあるのか。もし、これらのことが解明されなければ、少なくとも法の実現したものは、あやふやなものではないのか。このような法は、人々の行動の基準と指針になりうるのか。さらに、最終的には力の強いもの、あるいは成功したものが、この「善さ」と同一視されることにならないのか、等々の疑問である。

さて、このような法律学への批判は、さらに哲学に対しても向けられていった。彼は言う。「法律学のしたことは、哲学者による道徳的上部構造のために、基礎を提供することであった。国家一元論が、論理の次元から倫理の次元へと高められたのは、哲学者によってであった。そこでは、国家の権利が正義の問題となった。国家主権は、道徳的絶対性にまで浄化された」<sup>(40)</sup>と。この道徳的絶対性にまで高められた国家主権は、言うまでもなく、グリーンやボザンケ (Brenard Bosanguet 1848~1923) 等の理想主義国家論をさしているものであり、ラスキは、これらの批判を通じて、主権概念の再定義をはかり、徐々に、国家と社会 (society) 及び集群 (association)、国家と個人、国家と政府の問題を明確にしていくのである。

## 2) 国家と社会及び集群

ラスキにとって、国家と社会の関係はどうであったか、まずみてみよう。かれは、両者について明確な区別をしているが、この段階では、社会についての直接的分析や言及は少ないのである。したがって、国家と社会の対比をはかり、間接的に社会の概念を明確化し

ようとしたのである。<sup>(41)</sup> 国家=社会でないことを次のように言っている。「国家を通じて表現されない社会関係があるということは明らかである。……イギリスでは、誰もが、ローマ・カトリック教会は国家の一部であると主張しないだろう。つまり、ローマ・カトリック教会は、社会的決定要因として、そのメンバーに基づき活動していることは明確である。また家族は社会制度の一つであり、国家が影響を与えることは確かであるが、それは国家の一部ではない」<sup>(42)</sup>と。ラスキにとっては、この国家に包括されない部分、つまり社会とは、具体的には教会や労働組合であり、またその他の集群を意味していたのである。そして、「諸集群の成長が、国家の生命の関係をえてくるということは単的な論理である。一度忠誠が確立すれば、その集群のメンバーが同調した目的を実現するという制限つきで、諸集群は、メンバーにとって主権となるのである。例えば、労働組合の仲間に対する忠誠と、労働組合員が善と確信したある目的を妨げている国家への忠誠というものを二者択一する場合、一般の労働組合員は、国家に加担するという本来的な確実性は全くないのである」<sup>(43)</sup>と述べることからわかるように、国家の主権は著しく弱小化され、それに反比例して、集群の主権が強調されているのである。ラスキが、国家主権の優位性を逆転させたということで、彼が、この時代に、アナーキステックな思考に最も近づいたとされる理由になっているのである。<sup>(44)</sup> もっとも、ラスキ自身も、当時次のように述べていることは興味深い。「国家の基盤は明らかに個人主義の蓄積にある。それは、個々の意志が、究極的に自己決定にあるからである。そして、この決定は多様で複雑である。……国家の中には、政府意志が従属させられるような先天的確固としたものは、何一つない。アナーキーの可能性というものは、理論的にはいつでもあるのである」<sup>(45)</sup>と。

### 3) 国家と個人

この両者の関係をみると、さらに国家の主権のアプリオリな存在の否定と、国家権威の絶対性の否定がみられ、個人の主権が強調されていることがわかる。個人の第一義性と、優位性が強調されていることが、さらにはっきりしてくる。彼は「私たちは、国家の外に立ち、それを判断することを強いられる。そして、その存続よりも重要な目的があるという知識が、われわれのものとなる。……国家の生命は、もし、その成員がその権威に対して反抗するなら、生き残れないのである」<sup>(46)</sup>とまで言っている。このように、第一義的存在として個人がまずあり、この個人が多元的存在としての国家やその他の集群に、自らの実現を求めて関係を結ぶという考えは、国家そのものの存在の意味を全く軽減せしめてしまうのである。国家を功利主義者が考えたような、全く機能的な存在に限定してしまう

考えに、ラスキは立ったかのような思われる。これに関しては、第四章にして言及してみよう。

#### 4) 国家と政府

ラスキが、この初期の段階で、国家と政府との区別を明確にしていることに注目しておきたい。彼は次のように言っている。「われわれは、政府の意志に関して、国家がその基盤に持つ目的を反映する意志であるという確信に基づき、政府に国家の権威を与える。一般に、国家は、善なら生活を促進するために存在し、その生活を促進する活動としての権力を政府に与えるのだ」<sup>(47)</sup>と。ここで明らかにされているのは、国家の目的のために政府が存在し、その目的実現のために政府に権力行使を認めるということである。

ここで、国家と政府の区分をしたルソー（Jean Jaeques Rousseau 1712～1778）に言及しながら、ラスキの政府のあり方の特色についてみてみよう。ルソーによれば、人間は「一般意志」（*volonté général*）の下で、一人ひとりが社会契約を結び形成された共同体、つまり国家をつくる。そして人々は、国家の不可分な部分として主権者たりうる。つまり、人々は、国家の単なる被支配たる地位にあるのではなく、主権者にして同時に臣民であるということになる。この主権者たる臣民の選出した執行機関が、すなわち政府である。しかし、ラスキに言わせれば、ルソーが「公的権力にとっては、この力を結集して一般意志の指令に従ってこれを用い、国家と主権者との間の連絡に務め、人間において魂と肉体との結合が果たしている役割を、いわば、公的人格の中で果たす独自の代理人が必要となる。ここに国家における政府の存在理由があり……」<sup>(48)</sup>と言って、国家と政府の区別こそしているが、政府が自らの目的のために権力を強奪することに気づいていないと言うのである。<sup>(49)</sup>つまり、ルソーにあっては、「一般意志」の下に、国家も、その主権者である臣民も、そして、その代理人である政府を包括され、統体的に把握されている点に、ラスキは注目し、反論するのである。ラスキにあっては、国家と政府は相対的に捉えられている。つまり、両者の相違の中で、お互い刺激しあい、あるべき国家の目的の実現に、政府が努力するという捉え方をしているのである。もちろん、ラスキのこのルソー批判の根底には、彼が、ルソーの「一般意志」の概念にあまりにも神秘主義的なものを感じたからであり、そのことによって「一般意志」が不可知論に落ち入ってしまう危険性を感じていたからである。

#### 4. 「主権三部作」の問題

##### 1) 国家論

ラスキは、確かに国家の主権を制限し、また国家の絶対性の否定とともに、国家を他の諸集団とならぶ一結社にすぎないとした。しかしこのことによって、国家の存在そのものを否定してしまったわけではないのである。確かにこの時期にあつて、一部の研究者が指摘するように、極めて個人主義的姿勢を固持し、この個人主義を否定してまで、国家に服従することは誤りであるという考えをもっていた。また、市民が、政府の決定と、他の諸集団の決定との二者択一的状況において、彼らが自らの道徳的判断と良心に基づいて確信を持った段階で選択すればよいのであるという。そして、その選択いかんによっては、無政府的状态を生み出す危険にさらされても、いたしかたなしという極端な見解も表明しているのである。<sup>(50)</sup> しかし、ラスキは、国家の存在を否定し、無政府状態を良しとしたのでもなんでもないのである。国家の深淵にあるもの、国家が本来持つてしかるべき目的については否定するどころではなかったのである。彼は「その国の強さが、その国の目的遂行のために使用されるというような保証を持つなら、強い国に対して、誰も反対しないだろう」<sup>(51)</sup>とさえ述べている。問題は、実現の近代国家にあり、この国家は、本来の国家たらざらんところがあまりにも多すぎるというのである。彼は、今日の国家について次のような認識に立っている。「近代国家の社会的秩序は、労働者の秩序でなく資本家の秩序である。主要な権力者は資本家である……国家の目的も満たす最終的救済者としての国家、その国家の權威を受け入れようとする労働者は、上記の国家を拒否することを意味する」<sup>(52)</sup>と。このようなことから、われわれはラスキの国家論の特色として、次のような認識を得ることができる。つまり、彼が批判し、攻撃したのは、あまりに多くの問題をかかえた現実の国家であり、本来的に中立である国家や、国家が本来の目的を遂行できる「あるべき国家」に異義を唱えたものでも、まして否定したのでも決してなかったのである。

本来の目的を遂行すべき、「あるべき国家」を描きながら、また、その国家と現実の国家との落差を苦慮しながら、ラスキの国家論は構想されるのである。理想と現実の間に横たわる障壁は途方もなく堅牢で、彼がその困難に直面した時に、「このような袋小路以外のただ一つの道は、国家の中立化ということであり、そして、中立化できないのは、今ある手中に集中している権力の分割によって救われる」<sup>(53)</sup>と言っているのは、大変興味深いことである。つまり、ラスキは、次の手立てで、なんとかしてこの障壁の突破を考えた

のではなからうか。「あるべき国家」の早急な実現は、なかなか困難である。だから、まず国家の中立化の手段として、国家権力の分散ないし縮小化を企てようとしたのである。つまり、このような方策によって、少しでも、「あるべき国家」の実現に近づけようとしたのである。

この「あるべき国家」の理念を、この時点で、彼が具体的ではないにしても、抱いていたということは重要である。次の段階、つまり、1925年以降の多元的国家論完成期に至り、それはより具体化することになる。国家の本来の目的がより明確に展開されてくるのである。ここにおいて、ラスキは、「あるべき国家」を公的サービス団体として概念づけ、調整機関あるいは消費者の利益を組織する機関として機能を付与しているのである。われわれは、ここで、功利主義者の主張する国家の機能論的見解に近いものを、ラスキの国家論に読みとることができる。しかし、この初期の段階で、ラスキは、「あるべき国家」については、決して明確に論じているわけではないので、功利主義者のそれに合致するのかどうかの判定はしかねる。それは、上述したように、第二段階を待たねばならなかったのである。しかし、この段階での、「あるべき国家」の理念の発現と、その持続過程を認識しておくことは重要である。

さて、ここでわれわれは、ラスキの国家論の特色である「あるべき国家」の思考法というものに若干言及しておこう。これはまさに、国家論の目的論的方法と呼べるもので、存在論的方法とは対極にある。彼はこの目的論的方法をとる理由について、次のように述べている。「国家理論の正しい考查は、その理論が基づいた原理にあるのではなく、むしろ原理が機能することにある。実際に原理は過程から切り離すことはできない。つまり、目的論的思考は、根底において、帰納法的である」<sup>(54)</sup>と。われわれは、この目的論的思考と帰納法的思考を結びつけてしまうところに、ラスキの論理的方法の特色の一つをみることができる。これを単的に言えば、「あるべき国家」を、帰納法的方法により、より理想の「あるべき国家」に近づけるということであり、理念や観念の側に組み入れられてしまうことは明らかである。したがって、この方法論をとるかぎりでは、現実の国家を直視し、さらに現実の国家を定立させておく、その根本の原理への洞察に関しては、消極的にならざるを得ないだろう。実際にラスキもそうであった。<sup>(55)</sup>ラスキにあっては、「あるべき国家」の想定と、この地点から、現実国家の諸問題を眺めるという方法であり、「あるべき国家」の側から、現実の国家を批判するという方法であった。しかし、国家論の論究には、次のことも大変重要だと思うのである。それは、現実の国家の諸問題の論究もさるこ

とながら、国家の発生にまで逆のぼり、またその国家を定立させている原理とは一体何かを探る国家本質論である。しかし、ラスキにあっては、この方法はみられない。そして、この「あるべき国家」の構想という国家論は、ラスキだけでなく、イギリスの多元的国家論者のバーカーやコール（George Douglas Howard Cole 1889～1951）にあってはもちろんのこと、ラスキが批判したイギリス理想主義の国家論者のグリーンやボザンケなどにもみられる共通の特色なのである。

## 2) 自由論

ラスキの場合、国家の問題は、当然自由の問題に大きく関与している。多元的国家論における主権及び権力の多元化は、また個人の自由の拡大の問題でもあったからである。ラスキの政治理論が、この初期の段階で一貫して政治権力の縮小化、多元化に重点がおかれていた点を考えると、彼の自由に対する考え方も、積極的自由観（個人の目的と社会の目的とが合致する範囲での自由）より、消極的自由観（一般的にあらゆる拘束がないという自由）に傾いていたことは、納得できることである。彼の場合、この消極的自由観は、どこにその由来があるのだろうか。それは、彼が、イギリス自由主義の完成者として評価するミル（John Stuart Mill 1806～1873）である。<sup>(56)</sup> 彼の自由論の核心は、その著『自由論』（On Liberty 1859）の中で展開されている。ミルに言わせれば、人間は全く同じ環境に育っても、同じく思考し、同じく行動するとはかぎらないと。そして、個人の有する、また人間の特殊性において、自己を貫徹することに調和のとれた発達があると。そして、それを支えるのが自由だというのである。ミルの思想に一貫するものは、国家権力の肥大化が、この自由を常に害するという先入観念に近いものがあつた。つまり、消極的自由観を根底にたえず持っていたのである。<sup>(57)</sup>

ラスキの自由観も、このミルの自由観に多分に共通するものがあるが、ラスキにあっては、人格の発展の関係で自由が論じられる。彼は「自由を強調することは、このような状態においてのみ、人格の倫理的意識が、その当然の認識を得ることができるからである」<sup>(58)</sup> と言う。

人格の発展には、なぜ自由が条件にならなければならないのか。人格の発展と自由はいかなる関係にあるのかは、ラスキによっては、詳細には述べられていない。とにかく、人格の発展に必要不可欠のものであることを、彼は強調してやまないのである。

ところで、この自由とは、全く拘束の欠如を意味しているのだろうか。これに対し、ラスキは、平等の観念を出しながら、否定するのである。つまり、平等という観点に立て



ば、全く拘束がないということが、自由だとはかぎらないのである。ではラスキにあっては、自由と平等の関係はどのようなになっているのか。彼はこの関係を「同じ思想の異った面をもつ」<sup>(69)</sup>ものだと言っている。つまり平等は、「人格の十分な発達に対する機会」<sup>(60)</sup>であり、自由はまさに人格の十分な実現に必要な積極的平等の機会と定義するならば、何ら矛盾はないものになる。このように、自由と平等とは同一であるという視点に立って初めて、真の人格の発展が可能になるのだと言うのである。しかし、実現の社会の中で、この自由と平等との共存がうまく維持されるかという、必ずしもそうでない。観念的には、うまく統一されるかもしれないが、現実にはわれわれが直面する場面では、むしろ対立することが多くみられる。この点の論究にあっては、ラスキの不充分性を認めざるを得ないだろう。ここにわれわれは、またラスキの目的論的思考方法をみることができる。この目的論的思考によって、つまり、あるべき状態を想定すれば、矛盾の克服も可能であるということである。しかし、研究者によっては、ラスキのこの方法を、折衷主義的傾向だと指摘する人もいる。<sup>(61)</sup> この傾向は、グリーンの自由観を「行ふ価値のあること、あるいは、享受する価値のあること、さらにまた、われわれが他の人と共同して行い、享受する積極的力」<sup>(62)</sup>と規定したことに賛同し、一方でアクトン卿の自由観である「人は誰れも、権威や多数者、慣習や世論の影響に反して、自分の信ずることを展開することによって身を守らなければならない」<sup>(63)</sup>とする考えに賛辞を送っていることにあらわれている。これは単的に言えば、前者は積極的自由観であり、後者は消極的自由観である。対立する観念であるが、ラスキは両方を認めている。彼の初期の段階をみると、より消極的自由観の側に立っていることは、明確であるが、積極的自由観にも時には賛同するという、まさに折衷主義立場なのである。

とまれ、ラスキの国家論あるいは自由観が、時には矛盾を、時には折衷主義を含みながらの構想過程であったことは、注目すべきである。矛盾は、その解決のための方法を探ぐる力となるだろうし、折衷主義は、新しい何かを創り出す力となるだろう。ラスキの理論は、この初期の段階を経て、さらに発展していくことになる。そして、国家と自由の問題は、彼の最も中心的でかつ最大の関心であり、生涯にわたって、その関心は弱まることはなかったのである。

## 5. むすびにかえて

さて、われわれは、ラスキの政治思想の論究にあたり、変化するものより、変化を規定

する不動の何ものかを探ろうという態度に賛成するものであった。また、彼の思想の表面的変化より、内部において一貫するものを探ろうという立場に立つものであった。したがって、この不変なるものについて、最後について述べておきたい。第4章で明らかにしたことであるが、国家論においても、自由論においても、方法としては目的論的方法が貫かれていることは、注目すべきである。あるべき姿（国家）のものと、ある姿（国家）のものを二元論的に定立し、ある姿のものから、あるべき姿のものを帰納法的に想定していく方法は、社会学の方法としての妥当性は云々としても、とにかく、彼にとっては一貫した方法であった。<sup>(64)</sup> この方法論一つとってもみても、われわれは、ラスキの思想の不変なるものの一つにこれを挙げることができるかもしれない。しかし、重要なことは、この方法論の背後にあるもののように思う。つまり、目的論的方法の原動力となるものは、何かということである。われわれはここに、彼において形成された究極の価値観をみることができる。それは、「最善の自我の実現」を最高の価値とするラスキの信条である。しかし、このことに関しては「主権三部作」においても、彼が論理的に述べているわけではないので、その本質に迫りにくいものがあることも確かである。とにかく、この価値観こそは、ラスキの思想の中核をなすもので、これを根本的価値観として、政治理論を構想していくのである。国家論にあって、国家主権や、国家権力の分散化や弱小化をはかるのは、「最善の自我の実現」にとって、それが必要不可欠であったからであり、自由論にあって、自由を保障することは、この「最善の自我の実現」が可能になるための絶対的条件であったのである。ラスキにとって、自由は、彼の政治思想の中でも、最も重要な意味をもつものになっていく。

ラスキの政治理論の立場は、確かにプラグマティックである。場合によっては矛盾する見解もみられる。この立場が誤解されたり、プラグマティックな思考の弱点を指摘されたりすることになる。また、このようなことから、彼の政治思想に対し、様々な評価が下されている。しかし、これは別の見方をすれば、一つの側面を強調し、他の一方を否定してしまうような、択一主義の過ちを犯しにくいということにもなる。また、一つのイデオロギーにより、政治社会を窮屈に解釈していくということからも免れるかもしれない。ラスキは、あくまでも政治というものを、立体的に、そして多局面的なものと考えていたのではないだろうか。

とまれ、ラスキの信念や価値観は、揺らぐことはなかったと想像する。むしろ、われわれは、彼の信念や価値観に比べ、政治社会的状況・歴史的状況が変化し、そのために彼は、

プラグマティックな方法で対処したのだと想像するのである。プラグマティックな思考法は、状況の変化に柔軟に対応する。そして、適切とあらば、様々な思想や、その方法を取り入れることさえする。1920年代後半から30年代は、資本主義の全般的危機的状況の中で、デモクラシーの抹殺とファシズム国家の出現という、歴史は大きな激動を迎えつつあった。これらに直面し、ラスキは、いかに対処したらよいか苦悶する中、自らの信条や価値観を実現するために、自らの政治理論に変化をきたしてくるのである。そして、それらは、あくまでも一貫性を保持したところの変化であったと想像できる。ラスキの次の段階の政治思想に関しては、別稿にてさらに論究してみたい。

注

- (1) これは次のものをさす。Studies in the Problem of Sovereignty (New Haven : Yale Univ. Press, 1917). 以下 Sovereignty と略す。Authority in the Modern State (New Haven : Yale Univ. Press, 1919). 以下 Authority と略す。The Foundation of Sovereignty and Other Essay (New York : Harcourt Brace and Co., 1921). 以下 Foundation と略す。尚、この最後のものは渡辺保男氏の部分訳(『世界の名著』60巻、中央公論、1970年、351～395頁)があり、その個所の引用に関しては参考にさせていただいた。この「主権三部作」は主権というモチーフを追求し、歴史の実証研究を通じて、その本質を解明しようとするものであった。わが国では、ラスキの初期研究は、あまりみられないのであるが、欧米では初期研究が重要視されており、ラスキの学問的業績は、むしろ初期にあるという人さえいる。
- (2) 代表的なものに横越英一他著『ハロルド・ラスキ研究』(勁草書房、1954年)や「特集ラスキ研究」(『思想』第315号、岩波書店、1950年)などがある。
- (3) ラスキに関する邦文の研究書や論文については、ラスキ著、前田英昭訳『イギリスの議会政治』(日本評論社、1990年)の章末の文献目録に詳しい。
- (4) C.Howkins, 'H.J.Laski : A Preliminary Analysis', Political Science Quarterly, vol. LXV, No.3, September 1950. この中で彼は三段階に分け、多元主義の時代、民主的集産主義の時代、マルクス主義の時代としている。H.A.Dean, The Political Ideas of H.J.Laski (New York : Columbia Univ. Press, 1954). [野村博訳『ハロルドラスキの政治思想』法律文化社、1977年。] この中では五段階に分け、各時代ごとのラスキ思想を分析している。
- (5) この「同意による革命」論を中心に、ラスキの著作にとどまらず、講演や書簡の資料にあたって論究し、新しい分野を開拓したものに小笠原欣幸著『ハロルドラスキ政治に挑んだ政治学者』(勁草書房、1987年)がある。
- (6) ラスキが多元的国家論から階級国家論に変化することに関する論文は数多くある。このことを「移行」という語を用いているのに富田容甫氏(同著「ラスキの自由論」『ハロルドラスキ研究』勁草書房、1954年、98頁。)や関誠一氏(同著「ラスキにおける議会主義の問題」『茨城大学文学部紀要』第2号、1952年、164頁。)がいる。「発展」と用いている論者には、横越英一氏(同著「ラスキにおける多元的国家論から階級国家論への発展」『ハロルドラスキ研究』勁草書房、1954年、39頁。)などがある。「転向」を用いている論者に、関嘉彦氏(同著『現代国家における自由革命』春秋社、1952年、103頁。)や日下喜一氏(同著『現代政治思想史』勁草書房、1967年、187頁。)がいる。
- (7) ディーンの研究はその代表的なもので、彼は前掲書の序論の中でそのことを明確にしている。(H.A.Dean, op. cit., p.8. 邦訳書、7頁。)
- (8) ラスキの初期から後期の思想の一貫性を指摘したものに W.H.Greenleaf, 'Laski and British Socialism', History of Political Thought, vol.2, 1981 がある。渋谷武氏も一貫性の視点での研究を行っている。(同著『ラスキ 政治理論』弘文堂、1961年。)
- (9) 丸山真男著「ラスキのロシア革命とその推移」『現代政治の思想と行動』未来社、1971年、243頁。

- (10) 同上著、243～244頁。
- (11) この種の研究書には、K. Martin, Harold Laski (London : Victor Calloncy, 1935). [山田文雄訳『ハロルドラスキ』文弘社、1955年。]や G. Eastwood, Harold Laski (Oxford : A.R. Mowbray & Co. Ltd, 1977) がある。
- (12) K. Martin, op. cit., pp. 18～19. 邦訳書、18頁。
- (13) ショー (George Bernard Shaw 1856～1950) や ウェブ (Sidney James Webb 1859～1947) らが中心になり、議会制民主主義を基調とした漸進的な社会革命をめざす運動団体である1884年に正式にこの名を称するようになった。
- (14) M. D. Howe ed., Holmes-Laski Letters 1916～1935, 2 vols. (Cambridge : Harvard Univ. Press, 1953). [尚、部分訳として鶴飼信成訳『ホームズ・ラスキ往復書簡』岩波書店、1981年がある。]
- (15) C. Cross, The Fascists in Britain (London : Barrie and Rockliff, 1961).
- (16) 1946年、ラスキは自分に暴力革命論者として烙印をおしたということで、ニューアーク・アドヴァタイザー紙 (Newark Advertiser)、ノッテンガム・ガーデン紙 (Nottingham Guardian)、ディリー・エクスプレス紙 (Daily Express)、イブニング・スタンダード紙 (Evening Standard) を告訴した。しかし、これに敗訴し、ラスキは精神的ショックと莫大な費用を払わされることになる。これは彼にとっては、全く納得のいかない政治的判決だったのである。(K. Martin, op. cit., pp. 175～178. 邦訳書、245～249頁。)
- (17) プラグマティズムの語源は、ギリシア語の  $\pi\rho\alpha\gamma\mu\alpha$  (pragma) から来ており、元来は行為を意味するものであった。したがって、かつては行為主義 (行動主義、実行主義、実験主義) や、実用主義と訳されていた。今日ではプラグマティズムという表記の方が一般的である。(植田清次著『プラグマティズムの基礎的研究』早稲大学出版、1966年、49頁。) 尚、このプラグマティズムの発生は、1870年頃アメリカのマサチューセッツ州のケンブリッジで、わずか15人足らずの小さな会合「形而上学クラブ」に端を発している。そのメンバーにパーズ (Charles Sanders Peirce 1839～1914) やジェームス、ホームズ判事らがいた。彼らが共通に目ざしたのは、従来の絶対超越的あるいは、カルバニズム的予定説や、ドイツ観念論などの長い間着古された古くさい神聖で固定的な方式の衣服をはぎとって、暖かい生き生きとした、しかも、現実の変化に応じた理論を創り上げるということであった。(山本晴義著『プラグマティズム』青木書店、1957年、17頁。)
- (18) W. James, Pragmatism : A New Man for Some Old Ways of the Thinking (London : Longmans Green, 1907), p. 218. [榎田啓三郎訳『プラグマティズム』岩波文庫、1970年、106頁。]
- (19) Sovereignty, p. 15.
- (20) ibid., p. 19.
- (21) ibid., p. 21.
- (22) ibid., p. 23.
- (23) H. J. Laski, Grammar of Politics (London : George Allen & Unwin Ltd., 1967), pp. 22～23. [日高明三、横越英一郎訳『政治学大綱』上巻、法政大学出版会、1952年、49頁。]

- (24) *ibid.*, p.23. 邦訳書、50頁。
- (25) フィギス、メートランド、ギールケの三者の思想の関連に関しては、次のものに詳しい。  
F.W.Coker, 'The Technique of the Pluralist State', *American Political Science Review*, vol. XV, may 1921, pp.187~188.
- (26) H.M.Magid, *English Political Pluralism* (New York : Columbia Univ. Press, 1941), pp.11~12.
- (27) J.N.Figgis, *Church in the Modern State* (London : Longmans Green, 1914), p.52.
- (28) *ibid.*, p.87.
- (29) *ibid.*, p.49.
- (30) *ibid.*, p.49.
- (31) *Grammar*, p.21. 邦訳書、47頁。
- (32) M.D.Howe ed., *op.cit.*, p.117
- (33) *Sovereignty*, p.3
- (34) *Foundation*, p.210. 邦訳書、378頁。
- (35) *ibid.*, p.17. 邦訳書、365頁。
- (36) *ibid.*, p.18. 邦訳書、366頁。
- (37) *ibid.*, p.261.
- (38) ディーンは次のように言っている。「法に対する社会学的プラグマティックなアプローチは、デギュット (Lion Duguit 1859~1928) やポンド (Rescoe Pound 1870~?) やホームズ判事の新しい法学から直接引き出されたのであるが、これはイギリスの功利主義の源流と明らかに一致する」と。(H.A.Dean, *op.cit.*, p.22 邦訳書、20頁。) 尚、アメリカの著名な政治学者セバインもラスキの法のダイナミックに捉える方法に賛同している。(G.H.Sabin, 'Pluralism : A Point of View', *American Political Science Review*, vol. XV II, February 1923, p.412.)
- (39) *Authority*, p.44.
- (40) *Foundation*, pp.234~235. 邦訳書、398頁。
- (41) グプタによれば、ラスキは個人の自由や主権の制限に多くの関心があり、社会の概念にはあまり関心がなかったもので、明確な論理づけをしていないという。(R.C.Gupta, H.J.Laski, *A Critical Analysis of His Political Ideas*, 1966, p.58.)
- (42) *Authority*, p.26.
- (43) *ibid.*, p.325.
- (44) ホーキンスは次のように言っている。「多元主義者としてのラスキは、自由に対する並々ならぬ貢献において、自主的集群の要求と国家の要求を同一平面上に置くことにより本質的には哲学的アナキストであった」と。(C.Hawkins, *op.cit.*, p.337.)
- (45) *Authority*, p.30.
- (46) *ibid.*, pp.315~316.
- (47) *ibid.*, p.28.
- (48) 井上幸治訳「社会契約論」『世界の名著』30巻、中央公論、1971年、276頁。

- (49) Authority, p.28.
- (50) Sovereignty, pp.264~265.
- (51) Authority, p.374.
- (52) *ibid.*, p.88.
- (53) *ibid.*, p.384.
- (54) *ibid.*, p.349.
- (55) ツィルストラがラスキの政治思想研究にあたって主張するのも、この点である。彼は、多元的社会、つまり、国家、集群を存在論的に考察することにより、その存在構造を把握しようとするのである。これを「質的多元主義」(Qualitative Pluralism)と呼んでいる。  
(B.Zylstra, *From Pluralism to Collectivism : The Development of H.Laski's Political Thought* (Netherland : Royal Von Gorcum, 1970), pp.208~218.)
- (56) H.J.Laski, *The Rise of European Liberalism* (London : George Allen & Unwin Ltd., 1936), p.241. [石上良平訳『ヨーロッパ自由主義の発達』みすず書房、1951年、230頁。]
- (57) 早坂忠訳「自由論」『世界の名著』28巻、中央公論、1971年、280頁。
- (58) Authority, p.121.
- (59) Foundation, p.87.
- (60) Authority, p.182.
- (61) H.A.Dean, *op.cit.*, p.45. 邦訳書、45頁。
- (62) Authority, p.55
- (63) *ibid.*, p.55
- (64) ツェルバイもラスキの国家論には、たえず道徳性があり、国家は一方で規範的でありながら、科学的なところもあるという。そして、この多元的国家論は、仮説としてはよいかもしれないが、科学的考察の点からすると不充分であると言っている。(L.Zerlby, 'Normative Descriptive and Ideological Elements in the Writing of Laski', *Philosophy of Science*, vol.X II, April 1945, p.138.)